

ジェンドリン TAE の応用可能性

—文章表現教育と質的研究—

得丸 智子 (さと子)

1. 概要

本発表では、発表者の実践をもとに、TAE (Thinking At the Edge) が文章表現教育と質的研究に応用可能であることを報告する。

2. フェルトセンスとは何か

TAE は、米国在住の哲学者であり臨床心理家でもあるユージン・ジェンドリンが、メアリー・ヘンドリクスと共同開発した 14 ステップからなる理論構築法である。TAE の最大の特徴は、一種の「身体感覚」であるフェルトセンスを積極的に活用する点である。

フェルトセンス (felt sense) は、身体の内側に注意を向けると感じられる、言葉にしがたい漠然とした身体感覚である。例えば、言いかけて忘れたことを思い出そうとしているとき、私たちは、フェルトセンスに焦点を合わせて (アクセスして) いる。

ジェンドリンは、フェルトセンスを、カール・ロジャーズとのカウンセリングの共同研究を通じて見出した。成功するカウンセリングでは、クライアントは頻繁に自分の内側に集中し、言葉を探していた。ジェンドリンは、この行為をフォーカシング、そのとき注意を向けている対象をフェルトセンスと名付けた。従って、フェルトセンスを見出したといっても物理的に目に見える何かを見つけたわけではない。フェルトセンスは一種の概念装置であり、したがって、機能的に定義される。

2.1 フェルトセンスは知的である

ジェンドリンは、生きている人間の身体は絶えず環境と応答しているとし、その過程を体験過程 (Experiencing) と表現する。体験過程は、絶えず動いているが、注意を向けるとゆるやかにまとまる。これがジェル化と呼ばれる状態で、ジェル化すると、その感覚はフェルトセンスとして感じられ、私たちは、「それ」を対象 (object) として扱うことができ

る。即ち、「それ」について、考えをめぐらせたり、言葉にしたりすることができる。フェルトセンスは一種の身体感覚であるが、そこには、物理的な環境、過去、現在、未来との関わり、文化、言語、思考、学習などが含まれている。フェルトセンスは、知的に解釈された状況についての感じ (feeling) を含む。

2.2 二重アクセスと応答

人間はフェルトセンスと言語に、同時に独立的に二重にアクセスすることが可能である。たとえば、何かを言いかけて忘れてしまった場合、言語化以前の「言おうとしていたこと」のフェルトセンスにアクセスを保ったまま、言葉を入れ替え「A かな、B かな」と探すことができる。フェルトセンスは、その言語が適切でない場合には「違う」と応答する。適切な場合には、「ああ」「それぞれ！」等と「身体が解放される感じ」で応答を返す。フェルトセンスが適切にシンボル化されたとき、身体感覚が推進され (「身体が解放される感じ」がおき)、フェルトセンスは精緻化する。もとのまとまりを保ったまま、より詳しく精妙に変化する。それにつれてフェルトセンスの様相が明らかになり、言語化されていく。

2.3 交差に開かれている

フェルトセンスは、他との交差により新たなものを生み出す。ある文脈の下では暗在していたものが、新たな文脈を得て形を成すのである。フェルトセンスは、人間が生得的に持つ動物としての能力に根ざしており、本来的に普遍的基盤を持つとされる。人間は、他の人のフェルトセンスに直接アクセスすることはできないが、それに交差することによって、新たなものを創造していくことができる。この意味で、フェルトセンスは、他の人間との相互作用に開かれている。

3. TAE (Thinking At the Edge) とは何か

TAE をひと言で表現すると、フェルトセンスと

言語に、同時に独立的に二重アクセスしながらフェルトセンスと言語を応答させ、フェルトセンスを精緻化していく手順である。「フェルトセンスを精緻化する」ことを目的とするあらゆる活動に応用可能である。14 ステップの概要は以下のとおりである。

3.1 ステップ 1～5：微妙さ複雑さをつかむ諸ステップ

ステップ 1：テーマとするフェルトセンスを選び、感じ直す（ジェル化する）。

ステップ 2：フェルトセンスから言葉呼び出し、短い 1 つの文を作る。その短文の一カ所に空所（slot）を作り、そこに入る語をフェルトセンスから呼び出す。

ステップ 3、4：呼び出した語の一般的意味を確認した後、その意味に納まりきらないフェルトセンス独自の意味を言語化する（フェルトセンスは性質上、完全に言語化されることはない）。

ステップ 5：以上の過程を経た上で、フェルトセンスをいくつかの短文で表現する。

3.2 ステップ 6～8（9）：実例に語らせる諸ステップ

ステップ 6：フェルトセンスをよく表現する実例を集める。

ステップ 7：それぞれの実例に表れている、他にも適用できる一般的パターンを見出す。

ステップ 8：パターンを交差点にし、それぞれの実例を交差させる。実例相互の関連を、生成しつつ見出す（暗在していたものを解明する）。

ステップ 9：気づいたことを自由に書く。

これらの諸ステップにより、フェルトセンスの様相が詳しく解明されていく

3.3 ステップ 10～14：理論を作る諸ステップ

ステップ 10：フェルトセンスをよく表現する用語を 3 つ選定し、2 つずつペアにして“is”（「である」）で結ぶことを出発点として必要な語を加え、相互に関連づける。

ステップ 11：ステップ 10 で選定した用語を 2 つずつペアにし「本来」の語で結び、本来的意味に根ざす関係を探求的に見出す。見出された関係を新しい用語で表現する。

ステップ 12：フェルトセンスをよく表現する用語を、3、4 個選び直し、相互に組み込んで文を作ることにより関係づける。必要なだけ新しい用語を組

み込み、同様に関係づけていく。相互に組み込まれた用語は概念と呼ばれ、諸概念の総体は理論と呼ばれる。新たに加えたい用語がない状態になったとき、理論が完成する。加えたい語の有無はフェルトセンスが判定する。

ステップ 13：作った理論を他のテーマに適用してみ、説明可能性を検討する。

ステップ 14：最初のテーマに戻り、修正や調整をおこなう。ただし、理論の骨格は変えない。骨格を変える必要がある場合は、前のステップに戻ってやり直す。

4. TAE の文章表現への応用

電子メールや携帯メールの普及で、私たちを取り巻く言語環境は、一見豊かになっているかのように見える。しかし、外から入って来た言葉に、刹那的、表面的に反応する傾向や、他の人の言語表現をコピー＆貼付けにより安易に自分の言語表現に取り込んでいく傾向が助長されている。

TAE は、個人の身体感覚（フェルトセンス）から、丁寧に粘り強く言語表現を立ち上げていく方法である。これを文章表現教育に応用することにより、経験に根ざして深く考え自分の言葉で表現することを目標とする文章表現教育が可能になる。

4.1 ステップ 1～5：微妙さ複雑さをつかむ諸ステップを応用して詩やエッセイを書く

1) TAE ステップ 1～5 をおこない短い文をいくつか作る。それらをもとに詩を書く。（稿末資料 1 に留学生による詩の作成例過程を掲載する）

2) TAE ステップ 1～5 をおこない短い文を 1 つ作りキャッチコピーとする。経験を中心に起き、冒頭と末尾にキャッチコピーを配して短いエッセイを書く。

4.2 ステップ 6～8：実例に語らせる諸ステップを応用して自己 PR 文を書く

肯定的な自己の経験を 2 つ選び、それぞれからパターン（他の経験にも適用可能な短い一般的表現）を取り出す。経験とパターンを交差させて適用し気づいたことを書きとめ、自己理解を深める。自分を表現する短い 1 文を作りキャッチコピーとし、上の項の 2) の要領で自己 PR 文を書く。

4.3 ステップ 10～14：理論を作る諸ステップを応用して小論文を書く

テーマとするフェルトセンスを表現する用語を数語、フェルトセンスから呼び出し、ステップ 10～12 の方法で、用語を組み込んで互いに関係づけた文を作る。これを小論文の要旨とする。用語（概念）を使って小見出しをたて、小論文を書いていく。

5. TAE の質的研究への応用

近年、質的研究への関心が高まっている。ウィリッグ (2003) は質的研究の多くは「意味への関心」を持つとしている。フェルトセンスから理論を立ち上げていく TAE の手順は、経験や相互行為の意味を問う質的研究に応用可能である。

5.1 ステップ 1～5 により、研究データから得られたフェルトセンスの核心をつかむ

質的研究では、最初に研究データに繰り返し触れることを重視するものが多い (木下, 1999)。そこで得られるある種の「感受概念」(フリック, 2002) を出発点にする。TAE ステップ 1～5 は、この段階に応用することが可能である。これにより研究の核心をつかむことができる。また、研究の核心をつかむ過程を明示することができる。

5.2 ステップ 6～8 (9) により、研究データ全体の様相を把握する

質的研究では、研究データを一定のまとまりごとに抽象化する手順を含むものが多い。TAE のステップ 6～7 を、この段階に応用することが可能。事例からパターンを取り出し、そのパターンが当てはまる事例を収集していく。パターンをデータに適用しながら類似例を収集していく過程を「交差」と捉えることもできるが、よりオリジナル TAE に密

着した方法をとるならば、事例とパターンをクロスさせて適用してみて気づきを得ることもできる。この場合、事例間のより深い関連を探求することができる。(稿末資料 2 に日本人大学生によるパターンシートの作成例を掲載する)。

5.3 ステップ 10～14 により研究結果をまとめる

質的研究では、最終的にはいくつかの用語によりデータ全体を記述し、研究結果のまとめとすることが多い。TAE ステップ 10～14 を使うことにより、用語の関連づけを効率よくおこなうことができ、関連性が明確な概念構造が得られる。また、概念の関連づけの過程を明示することができる。

6. まとめ

以上報告したように、TAE は文章表現教育や質的研究に応用可能である。今後も実践と研究を重ねていきたい。

参考文献

- ウヴェ・フリック (2002) 『質的研究入門』春秋社
 C.ウィリッグ (2003) 『心理学のための質的研究法入門』培風館
 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂
 得丸さと子 (2008) 『TAE による文章表現ワークブック』図書文化
 鈴木(清水)寿子・得丸さと子(智子)(2008) 「作文添削活動の実践研究における添削者の学び—TAE を用いた内省的分析—」『言語文化と日本語教育』36,11-20.
 Eugene Gendlin & Mary Hendricks (2004) Thinking At the Edge, Folio, 19-1.

とくまる さとこ / 日本女子体育大学 体育学部
 tokumarusatoko@yahoo.co.jp

稿末資料 1 留学生による詩の作成過程

| |
|--|
| ①テーマ*テーマを1つ選び、「この感じ」として持つ。下に事柄をメモする 私の留学の生活の真实的気持ちについて |
| ②浮かんでくる言葉*「この感じ」のフェルトセンスに浸りながら書く 寂しい 帰りたい 疲れた ねむい 生活苦しい 迷茫的心情 (中国語のメモ) 関心と愛がほしい かぞくと友達にいたい 家の味を お母さんの料理を食べたい・・・ |
| ③仮マイセンテンス*フェルトセンスを短い1つの文にする。語も文型も自由に作る 忙しくて単調の生活だ *最も大事な言葉に二重線を引く |
| ④空欄のある文*仮マイセンテンスの二重線の部分を空欄にした文を書く 忙しくて()の生活だ *空欄に入る言葉をフェルトセンスから呼び出す |
| キーワードの通常の意味と、フェルトセンスの意味を書く |

| キーワード1 単調 | キーワード2 バック | キーワード3 灰色 | キーワード4 鳥 |
|--|--|---|---|
| ⑩通常の意味 (1) 変化に乏しいさま。 一本調子「-な生活」「- リズムを刻む」 | ⑩通常の意味 (1) 背。背中。背後 (2) 背 景 (3) 後退、後進すること (4) 戻すこと。返還すること (5) 後援。後ろだて (6) 運 動競技で後衛。 | ⑩通常の意味 (1) 灰のような薄黒に 色。鼠色。(2) 陰気なこ と。また無味乾燥なこと (3) 主義、主張などは っきりしないこと。ま た、犯罪容疑が完全には 晴れないこと | ⑩通常の意味 (1) 鳥類の総称 (2) (鶏 と書く) 特にニワトリの 称。→鳥帰る、鳥雲に入 る ④単調 |
| ⑪フェルトセンスの意味 毎日同じことをする。それ が幾日にもわたって繰り返 されていく。 | ⑪フェルトセンスの意味 出発の原点にもどること。後 退 | ⑪フェルトセンスの意味 白色と黒色の間の色で す。雨が降って時天空の 色。 | ⑪フェルトセンスの意味 動物だ。鳥とばれる動物 だ。いろいろな種類があ る |
| *大事な言葉に波線を引く | | | |
| ⑭新たな文を自由に作り、その後に④の文の空欄にキーワード1, 2, 3を入れた文を並べる 今までの心情は雨が降っている天空の色です 鳥は天空で自由的に飛んでいるのに、どこに行ったようがいいことがわかりません いろいろなことをやった、しかし、最後はいつも終点が原点になっています。 忙しくて (バック) 生活だ 忙しくて (灰色) 生活だ 忙しくて (鳥) 生活だ 忙しくて (単調) 生活だ | | | |
| 完成した詩 | *詩の草稿のできあがり | | |
| 旋回 | <p>天空は広くて後で何が起こるかわからない 毎日、ずっと広い天空を飛んでいるのに、 どこに行けばよいか、ぜんぜんわからない</p> <p>単調な飛行機みたいな生活 一日の最後の時、終点と始点はいつも同じ 私は、出発点で旋回している</p> <p>(解説) この詩は、私の留学生活の真実の気持ちです。 いつも、バイトをして疲れて、生活は全部自分でやっ て、本当につまらないです。そして、そのような環境 で、旋回する気持ちを持っています。</p> | | |
| 日本の春は雨が多い 突然、大雨が降るかもしれない 私の心情の変化は、日本の雨のよう 雨が降る時、天空の色は灰色 その灰色は私の心を占める | | | |
| 鳥は天空で自由に飛ぶことができる 私はその自由な飛行をしたい 日本で本当に自由に飛んでいて、 以前は知らなかった気持ちを持っている | | | |

稿末資料2 日本人大学生によるパターンシートの作成例 (研究テーマは「レストランの視線論」)

| パターン3 | 店が客を作る |
|-------|---|
| ①実例 | レストラン A は、名前や顔を覚えてくれるので、自分も印象に残る。予約した時の名前を覚えていて、「〇〇様、ご予約ありがとうございます」と名前を言われる。覚えているんだなあ。(A 店) |
| ②他の実例 | <ul style="list-style-type: none"> ・注文が聞き取れなかったらしい。「はあっ?」と言われて、こっちは店員に気を使わなくなる。「もう一度よろしいですか」とかなんとか言えないものかなあ。店員の口調が悪い。こっちは、気を遣わなくなる。店員の態度が悪くなると、こっちは、店員に気を使わなくなる。(B 店) ・目線の送り方がよくない。視線が落ちてる。通りすがりに見る感じ。緊張感がない。たんに見られている感じ。こっちはだらけてくる。(E 店) 店員の挨拶が控えめで落ち着いた接客。上品さを演出しているなと思った。静かに言われると大きな声では返さない。店側がボリュームを調節してるなと感じる。(F 店) ・入ったときに、店長がメーカーさんと話していて、挨拶しなかった。これはダメ。感じわるいな。期待できないな。(G 店) |
| メモ | 高級な店や、落ち着いた店は丁寧な接客が多い。そのような店は、自分が少し上品になれる。丁寧な接客をさせるに価する人間になろうとする。りんとするのである。そのような店では、きちんと気構えをし、料理と向き合う。 |